SOLAN HARMONY

２週間の休み明け、みなさんの元気な姿を見ることができて、ほっとしております。夏休みは有意義に過ごせましたでしょうか。親子でゆっくり対話をしたり、さまざまな体験を共有したりする時間が取れたなら嬉しいです。

前号の学級通信では、進路に関する話を少し紹介しましたので、今回は引き続き、私の長男に関するエピソードをお話ししたいと思います。この話が、SOLANの子どもたちが進路を選択する際に、少しでも参考になれば幸いです。

この春、「学校法人角川ドワンゴ学園Ｓ高等学校」を卒業し、東京に本社があるＩＴ系企業の上越支社に就職した長男の話です。
この話を聞くと、第一印象で「優秀な子なのかな」「パソコンに詳しかったり、プログラミングのスキルが高かったりするのかな」という感想を持たれるかもしれません。しかし、実際にはまったくそんなことはなく、中学時代、勉強は本当に大の苦手で、課題を締切を守って提出することや、コツコツとテスト勉強をする姿は一度も見たことがありませんでした（このエピソードについては、８月２日（金）発行の学級通信をご参照ください）。

では、そのように勉強が大の苦手だった子が、どのようにして広域通信制高等学校を過ごし、ＩＴ系企業に就職することができたのか。これについて、少し興味が湧いてきませんか？

まず、Ｓ高等学校すなわち広域通信制高等学校に進学した長男は、自宅にいながらオンラインで講義を受講し、課題に取り組む日々を送りました。その結果、「自分の自由になる時間」をかなり手に入れることができました。そこで彼は「よし、バイトをしよう！」と、近所のコンビニでアルバイトを始めました。もちろん、初めての経験ばかりで、いつ疲れて「辞めたい」と言い出すのか心配していましたが、実際には逆にオーナーや従業員の大人たちに面倒をみてもらいながら仕事を覚え、接客を通じてお客さんから感謝される経験を積むことで、自己肯定感が大きく高まりました。
その結果、学ぶことの意義や他人とコミュニケーションをとることの喜びを実感し、それが少なからず影響して、Ｓ高等学校のレポートやテストでも好成績を収めることができ、さらに自己有用感が向上しました。
長男の場合、「やる気スイッチ」を押したのは、Ｓ高等学校への進学とコンビニでのバイト経験でしたが、これはその子一人一人の強みや特性によって異なるはずです。何がその子の「やる気スイッチ」を押すのかは誰にも分かりませんが、どの子にも必ずそれがあると信じています。

その後、高校２年生の秋、そろそろ進路を考えなければならないという話を親子でしていたところ、偶然、上越に出店しようとしていた東京のＩＴ系企業の社長と出会う機会がありました。長男がその企業に少し興味を持ったため、社長にお願いして、オンライン会議で会社の説明を聞く場を設定してもらいました。そこで、私が感心したのは、長男が受け身で社長の説明を聞いただけでなく、自分から積極的に質問をしたことです。中学時代の姿からは、そのような行動は想像もできませんでした。「やる気スイッチ」次第で、人はここまで変われるのか、と本当に驚きました。
その後、高校３年生の春に採用試験を受けたときのエピソードは、またの機会に学級通信でご紹介します！